キリストのことばに活かされる　　黙示録 2:12-17

今朝は、ペルガモンの教会へのメッセージをとりあげます。13 節に「わたしは、あなたが住んでいるところを知っている。」とあります。これはどこに住んでいるかという場所のことではなく、その中でどんな風に過ごしているかを知っているということでしょう。「わたしはあなたのことを知っている」このことばを私たちが、人の目には触れなくても、良いことに励んでいる時に聞くのはうれしいことです。たとえ人から誤解されるようなことがあっても、試練の中にあってもキリストが「わたしは、…知っている。」と言ってくださるなら、それはどんなにか私たちの慰めと励ましとなることでしょうか。しかし、もし私たちが、悔い改めていない罪、告白していない罪、隠した罪を持ったままでいるとするなら、キリストから「わたしは、…知っている。」と言われるのは、大変なこと、恐いことです。今日の箇所を読みますとペルガモン教会へのメッセージは、そのどちらの意味も含まれているように思います。

1)ペルガモン教会への賞賛と励まし

まず賞賛と励ましです。ペルガモンは七つの街の中では、比較的新しくローマ帝国の領土になった街です。ローマ皇帝アウグストは、皇帝の威信を示すため、紀元前 29 年、この町に皇帝崇拝の神殿を建てました。また、ここにはその前からギリシャの主神ゼウスの王座もありました。13 節に「わたしは、あなたが住んでいるところを知っている。そこにはサタンの王座がある。」とあるのは、そのことです。当時、クリスチャンは、ギリシャやローマの神々を拝まず、皇帝崇拝をしなかったため、「無神論者」と呼ばれ、迫害を受けました。ペルガモンのクリスチャンも同じように、迫害の中にあり、アンテパスが殉教しましたが、「イエス・キリスト」の御名を堅く保ちました。13 節の後半に「しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの確かな証人アンティパスが、サタンが住むあなたがたのところで殺されたときでさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。」とある通りです。

ここでアンテパスは「確かな証人」と呼ばれていますが、このことばはキリストご自身の呼び名でもあります。黙示録 1:5 に「また、確かな証人、死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにあるように。」と書かれています。黙示録 3:14 では「アーメンである方、確かで真実な証人、神による創造の源である方がこう言われる。」とあります。キリストが「証人」と呼ばれるのは父なる神様をあかしするお方として世に来られたからです。そして、キリストは、キリストを信じる者たちに、キリストの「証人」になるように命じられました。キリストはヨハネ 15:26-27 で「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいます。あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。」と言われました。聖霊はキリストをあかしするお方であり、クリスチャンは、この聖霊によってキリストをあかしすることができるようになるのです。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。・・・地の果てまで、わたしの証人となります。」（使徒 1:8）とのことば通り、アンテパスとペルガモンのクリスチャンは「わたしの証人となれ」とのキリストの命令に従いました。このようにペルガモンの教会の人たちの信仰をキリストは高く評価されています。

2)ペルガモン教会への叱責

次は叱責のことばです。ここでペルガモンの教会は「ニコライ派」を奉じている人々をそのままにしていることについて叱責されています。14 節と 15 節に「けれども、あなたには少しばかり責めるべきことがある。あなたのところに、バラムの教えを頑なに守る者たちがいる。バラムはバラクに教えて、偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまずきを置かせた。同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを頑なに守っている者たちがいる。」とあります。ここで「バラムの教え」と呼ばれている「ニコライ派」というのは、ニコライという人が始めた教えで、アジア地域にかなり広がっていました。当時、キリスト教以外はどの宗教でも偶像に備えたものを食べ、神

殿娼婦や神殿男娼と呼ばれる人たちとまじわることが宗教儀式の大切な部分でした。当時はそれほど珍しいことではなかったということです。ニコライ派の人たちはクリスチャンに「郷に入りては郷に従え」ということを教え、「それぞれの国にはそれぞれの宗教があり、習慣がある。クリスチャンはそうしたものを斥ける必要はなく、それを取り込んでいけば良いのだ。」と言って、クリスチャンが偶像の儀式や不品行にかかわることを正当化するどころか、それを奨励していたのです。しかしどの国の国民であっても、どんな文化背景を持っていても、どの時代になっても、クリスチャンには、譲れない一線というものがあります。

ペルガモンのクリスチャンのほとんどは殉教をも辞さない忠実で、熱心な人々でした。ニコライ派の人々は少数者にすぎなかったでしょう。しかし、ペルガモンのクリスチャンは、ニコライ派の人々が教会の中に入り込んでくるのを許してしまっていたのです。寛容であることは素晴らしいことです。しかし、誤った教えさえも受け入れてしまうのは寛容ではなく妥協です。注意したいのはキリストは、ペルガモンのニコライ派の人々を叱責しているのではありません。それを許しているクリスチャンを叱責しているのです。「自分は偶像にかかわっていない。不品行もしていない。」といって批判するだけで安心しているクリスチャンを責めているのです。教会が教えを曲げ、聖なるものを尊ばず、霊的な成長を妨げるものに対して、間違った寛容を持ち、無頓着でいる罪が責められているのです。教会は全ての人が神に愛されているという恵みと神の聖さが保たれる場所です。神の恵みばかり強調されると教会は自己中心とわがままで責任転嫁する人の集まりとなるでしょう。しかし神の聖さばかりが強調されると互いに裁き合う人の集まり、律法主義的な集団となります。それこそいつも神の名においてお互いを裁き合っているような集団となるでしょう。

キリストは続く 16 節で「だから、悔い改めなさい。そうしないなら、わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦う。」と言われます。黙示録 2:12 に「鋭い両刃の剣を持つ方が、こう言われる」とあります。この「両刃の剣」とは、何でしょうか？　それはキリストが語られる神のことばのことです。ヘブル 4:12 に「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」とあります。「たましいと霊」「関節と骨髄」というのは、分けることが難しい部分を代表している表現です。微妙な部分ですが分け方しだいで結果は大きな違いとなって出ます。以前、テレビで脳神経外科の世界では「神の手」と呼ばれている福島孝徳（たかのり）先生の特集がありました。脳神経外科ですから頭の中の脳のあたりの手術をされるわけです。新しい手術法も生み出しておられます。その中で私の心に留りましたのは「手術の際、絶対傷つけてはいけない神経に気を使いながらわずかな隙間を探します。1 ミリの隙間があるかないかは手術に大きな影響が出ます」と言われたことです。ぼんやりしていては見つからないと言うのです。これはみことばも同じことだと思います。神のことばは私たちの心の思いや計画を判別します。この神のことばは、すでにキリストから教会に与えられています。教会で、神のことばが神のことばとして語られ、聞かれるなら、実際「神のことばは生きていて、力がある」のですから、教会の霊的な部分にも、また目に見える実際的な部分にもかならず結果をもたらすはずです。もし、そうでないとしたら、それは神のことばが語られていないか、語られていてもそれを信仰をもって聞かれていないからではないでしょうか。キリストはペルガモンの教会に、神のことばがさらに力強く、また、明確に語られるよう求められました。もし、教会がそれをしないなら、キリストご自身が来てさらに厳しい対処をすると、ここで言っておられるのです。

3)ペルガモン教会への約束

最後にペルガモン教会への約束のことばを見ましょう。キリストのメッセージが叱責のことばでなく、約束のことばで終わっているのは、大きな慰めです。その約束のことばは 17 節にあります。「勝利を得

る者には、わたしは隠されているマナを与える。また、白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている。」「マナ」というのは、エジプトから脱出したイスラエルを約束の地に入るまで養った天からのパンです。コリント第一 10:2-4 に「そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマを受け、みな、同じ霊的な食べ物を食べ、みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストです。」とあります。これはイスラエルが出エジプトにおいて葦の海を通って救われたことを「バプテスマ」に、日ごとにマナを食べ、岩からの水を飲んだことを「聖餐」になぞらえています。バプテスマを受けて神の民となったクリスチャンを天国にいたるまで養う「マナ」は聖餐です。神のことばも信仰の糧です。キリストの口から出る神のことばは、私たちの隠れた思いをもあばく「両刃の剣」であるともに、私たちのたましいを養う天からの糧でもあるのです。勝利を得る者は、みことばと聖餐という霊的な糧で豊かに養われ、天国に至るという約束がここにあります。

「白い石」というのは神から与えられる「義」のことです。古代の裁判では、裁判員がそれぞれ黒い石と白い石とを手渡され、有罪のときは黒い石を、無罪のときは白い石を投じました。ですから、「白い石」というのは「無罪宣言」を表わします。罪を悔い改め、赦しを求めて生きるクリスチャンには「無罪宣言」が手渡され、この「無罪宣言」が天国の扉を開くのです。私たちは、この「無罪宣言」がキリストによって勝ち取られたものであることを知っています。キリストの身代わりの死によって、キリストが私たちの罪を引き受け、私たちはキリストの義を頂くのです。私たちは本来持っていなかった義、キリストによって与えられる義を、悔い改めと信仰によって受け取るのです。この白い石には、「それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている」のですが、その名とは何でしょうか。それは、救われ、赦され、きよめられたクリスチャンに与えられる新しい名前のことです。天の御国では新しい名前がつくのです。つまり私たちは、全く新しい存在となって神の前に立つのです。

では、最後にどうしたら私たちは「勝利を得る者」になり、この約束を、自分のものとすることができるのでしょうか。

第一に、キリストに聞くことによってです。キリストは「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」と言われました。耳は誰にもついているものなのに、ここでわざわざ「耳のある者」と言われているのは、神のことばを従順な心で聞く人のことを指しています。キリストの賞賛のことばを聞いていよいよへりくだり、キリストの叱責のことばを聞いて、真剣に悔い改める人のことです。キリストの叱責のことば、勧告のことばを聞かないで、約束のことばだけを聞くことはできません。

第二に、悔い改めることによってです。罪の赦しは天国の鍵ですが、その罪の赦しを自分のものにするのは悔い改め以外ありません。「勝利を得る者」とは悔い改める人のことなのです。
あまりにも大きな重荷は人を疲れ果てさせますが、何の闘いもない生活は人の精神を無力にします。そのため、自分の罪にさえ気づかず、悔い改めのない日々を過ごしてしまうのです。

もう一度、両刃の剣であるキリストのことばに自分を委ねましょう。人を傷つけるような鋭い刃物であっても、それを外科医が使えば、患部を取り除き、人を生かすために用いられます。キリストのことばは生きていることばであり、また、信じる者を活かすことばです。キリストのことばによって、悔い改めに導かれ、この年も希望をもって歩みましょう。